

次回（7月）例会

期日：7月26日（日）
夜7時～8時半

○月のひかり

月のひかりはみつけます、
暗いさみしい裏町を。

いそいでさつと飛び込んで、
そのまづしいみなし児が、
おどろいて眼をあげたとき、
その眼のなかへもはいります。
ちつとも痛くないやうに、
そして、そこらの破ら屋が、
銀の、御殿にみえるよに。

子供はやがてねむつても、
月のひかりは夜あけてまで、
しづかにそこに佇つてます。
こはれ荷ぐるま、やぶれ傘、
一本はえた草にまで、
かはらぬ影をやりながら。

金子みすゞ

仏教用語の解説⑩

《自然》

一般用語：しぜん
仏教用語：じねん

「自然」を辞書で調べますと、
①人間の作為によらないで存在するもの
②人や物の本来の性質や状態
③ひとりでにそうなるさま
④ありのままであるさま などとあります。やはり私たちにとつて自然（しぜん）という言葉からは、木や緑が豊かな野山、雨が森の木々をぬらし、ゆるやかに流れゆく小川のせせらぎといった情景を思い浮かべます。

そのように願う自然も、地球環境が悪化の一途をたどり、温暖化が加速度的に進む中で自然が破壊されて、砂漠化や洪水の被害が頻発し、今、人類が抱える最大の危機的課題となっています。

この「自然」は仏教用語では、「じねん」と呼びます。

特に親鸞聖人は「自（おの）ずから然（しか）らしむ」と読み、「阿弥陀仏の本願力を信じ、救いをたのみ念仏者は、何のはからもなく本願力によつて



自ずから浄土に往生せしめられること」と味わっておられます。

まさに絶対他力の阿弥陀様のご本願による救いのはたらきや、さとり境地を示す言葉として味わっておられるのです。

つまり、人間のはからいを超えた如来のはたらき、私たちを大きく包み込むはたらきを「自然（じねん）」と呼んでおられるのです。

してみれば、私たちが一般的に使う「自然（しぜん）」も、私たちを大きく包み込み、私たちを生からしめている大きなはたらきとして、野山や川を受け止めることが大切ではないかと思えます。

「地球に優しく」とか「自然を大切に」などといいますが、実は優しく大切にされているのは自然の恵みにより生かされている私たちの方で、自然を征服しているのがごとく思い上がってきた現代人の意識を変え、おかげさまでこのころを取り戻すことではないでしょうか。



題材法話

○正信偈を味わう⑪

正信偈の一難中之難無過斯「までの前半部分は、お釈迦様の直接のお念仏の教え、すなわち「仏説無量寿経」にもとづく親鸞聖人の讃歌でありました。今回からは後半部分に入りよます。インドのお釈迦様の教えが、中国を経由して、はるか遠くの日本の親鸞聖人のところまで届くまでには、数知れない多くの人たちのおかげがあったことであります。

特に親鸞聖人は、七人の方々を重視されて七高僧と呼び讃えられています。この七高僧の方々は、それぞれのお念仏の時代で、お釈迦様のお念仏のみ教えを、間違ひなく伝え示してこられたのであります。その七正信偈の後半は、その七高僧のみ教えにもとづく親鸞聖人の讃歌です。



ず最初の4句では、七高僧さますべてをまとめて讃歎されています。

印度西天之論家 中夏日域之高僧 顯大聖興世正意 明如來本誓応機

いくつものように分りやすく国インドの論家（西の方の龍樹菩薩と天親菩薩を指しています）、ついで中国の高僧（これは曇鸞大師と道綽禪師と善導大師の三師を指しています）、そして日本の高僧（これは源信僧都と源空・法然上人を指します）の方々、これら七人の高僧は、お釈迦様がこの世にお出になられた、本当の意味を明らかにされまし

○七高僧さま

七高僧さまとは、



龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空の七人で、すが、お念仏を頂く真宗門徒にとつては馴染が深く、門徒に説教などでもよく耳にし

ます。お釈迦様は「八万四千の法」といわれるように、いろいろなことが、本当に法を説かれましたが、このなかには、南無阿彌陀仏のご本願であり、特別な人だけしか通用しない特別な人だけの教えではなくて、あらゆる人に通ずる教えです。あるところでは、味わすで

きましました。そのどこでも通じる教えであること、別の言い方ですれば、すべてのものが救われる教えは、この南無阿彌陀仏の教えでしかないということになりま

す。そのことを身をもって示してこられたのが、まさに七高僧さまなのであります。

○はるかな時間と空間を超え



た南無阿彌陀仏の教えが、千数百年の時を超えて、インドから中国を経てはるか彼方の日本の親鸞聖人に至ったのであります。それが、時代的にも、国や場所的にも大きな変化の流れの中にあつたはずですが、歴史の流れの中にあつても、この七高僧の方々は、お釈迦様の真理の教えを確固たるものとして伝承されてきたのであります。

もしもこの七高僧がおられなかつたならば、私は弥陀の本願に出会う事は、かなわなかつたでしようし、流転輪廻といわれる迷いの世界をいつまでもいつまでも迷ひ続けなければならなかつたであろう」と、親鸞聖人は七高僧を讃えられて

いるのです。

このようにまず七高僧をまとめて讃歎された後で、次に七人の方々を順に讃歎されておられます。その最初が龍樹菩薩様です。

5月例会住職法話より
以下次号

